―人がいきいきと生きる
静岡県をねがって―

地方自治

ネットワーク
しずおか

No95 号
2023 年 11 月 15 日

（主な内容・目次）

≪第 16 回定例研究会≫
◇「歴史から見た中山間地域の経済とくらし」

長谷川達朗　静岡大学人文社会科学部経済学科
専任講師 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

◇ブラ林 in 龍爪山 ・・・・・・・・・・・・ 12

静 岡 県 地 方 自 治 研 究 所
〒422-8062　静岡市駿河区稲川２丁目 2-1
セキスイハイムビル 7F　静岡自治労連気付
Tel 054-282-4060　　Fax 054-282-4057
jichiken@s-jichiroren.com
発行人・川瀬憲子　編集人・林　克

南アルプスの盟主、赤石岳山頂（静岡市葵区）

2023 年 9 月 7 日に開催された第 16 回静岡地方自治研究所定例研究会で長谷川達朗静岡大学人文社会科学部講師の報告をまとめたものです。

長谷川先生の紹介
－島根大学法文学部修了
－一橋大学大学院社会学研究科修士・博士課程修了
　－２０２３年４月～、静岡大学人文社会科学部経済学科講師

研究テーマ
　－近現代の山間地域を対象とした社会経済史研究
　－兵庫県宍粟市を事例に研究（＋実践）を継続中

はじめに

今、ご紹介いただきました長谷川達朗と申します。会場に静岡大学の先生方が並ばれて少し緊張しています。今日は静岡県地方自治研究所の定例研究会にお招きいただきありがとうございます。静岡大学の経済学科に赴任してきたのですが、これまでは文学部に近いところに身を置いて歴史研究をしてきました。今日も歴史から見た話をさせていただきます。

自己紹介をさせていただきますと、出身大学は島根大学で、その後東京の一橋大学の大学院に移り、今年の４月に静岡大学で採用していただきました。学部時代から中山間地域を対象とした社会経済史研究に取り組んでいます。

今日は静岡の話もできればよかったのですが、着任したばかりで準備ができておらず、中途半端になるよりは今まで自分がやってきたことを話した方が伝わるのでないかと思い諦めました。これまで兵庫県の研究をしてきましたので、今回はその話をしたいと思います。

兵庫県や静岡県に限らず、全国いたるところに中山間地域は存在します。今日山間地域や中山間地域と呼ばれる場所を研究する理由として、私がどういうモチベーションを持っているのかを最初にお話しします。過疎化や地域経済の疲弊といった問題は戦後長らく指摘され続けておりますが、近年は一部の政治家によって「地方消滅論」や「農村たたみ論」と呼ばれるような議論、つまり人口が減少して地方という社会が消滅してしまう、自治体がなくなる、そもそも

農村に中途半端に人がいることが不効率なので「選択と集中」の発想で農村なんて不必要だというような議論が平然となされることに強い危惧を感じています。

中山間地域にも固有の価値があります。しかし、私が行ってきた歴史研究の中では、長い間経済発展から取り残されてきた遅れた山村という認識があり、比較的研究が少ない分野でした。だけど、いくら人が減っても、今もそこに住み続けている人がいることを無視してよいはずがありません。山間地域の人たちがどのようにそこで生きてきたのかを歴史的に明らかにすることが、地方消滅論などへ対抗する一つの手段だと考えています。

また、山間地域に注目することは、東日本大震災以降の歴史学の課題としても重要だと思います。震災以後、東北地方を対象とした歴史研究、経済史研究が積み重ねられ、原発事故などの激甚災害を引き起こしてしまった政治的、経済的要因、中央―地方のいびつな関係などが明らかにされています。ただ、東京―東北にみられるような中央と地方の不均衡な関係は、多かれ少なかれ全国に存在していると思います。そこで今日は、兵庫県を事例に中央と地方の関係がどのように形成されてきたのか、そのことが山間に生きる人々にどのような意味を持ってきたのかについてお話ししたいと思います。

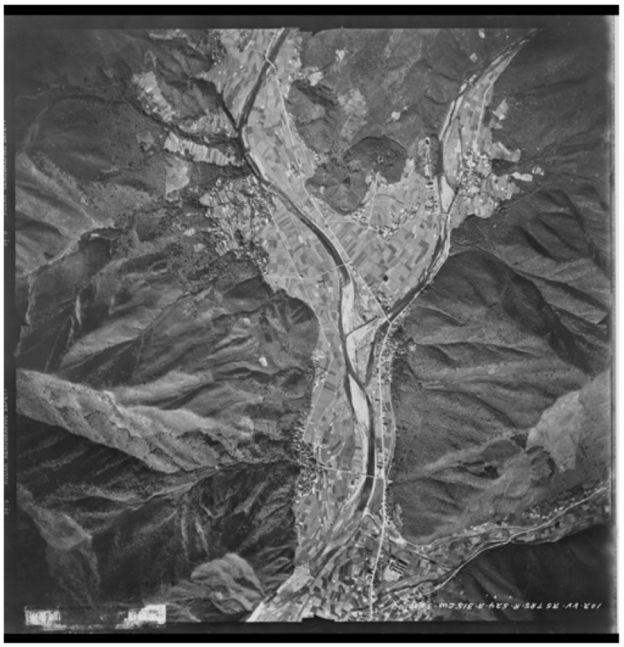
ところで、歴史研究者は過去の歴史だけをみているわけではありません。歴史を通して地域や人に貢献しようとしたり働きかけを行うことを地域歴史実践と呼び、こうした取り組みをする研究者も多く存在します。まず、今日お話しする地域の紹介をしますが、それとあわせて私が地域で行ってきた実践活動も紹介したいと思います。

今日お話しする地域は兵庫県宍粟(しそう)市というところで、兵庫県西部中国山地のはずれにある山間地域です。宍粟市は、2005 年にもともとあった宍粟郡の 4 つの町村が合併してできた自治体で、兵庫県でいちばん面積が広い広域自治体となっています。市域の約 9 割を森林が占めます。高度成長時代を通して人口が減り、70 年代から少し持ち直すのですが、90 年代以降また減少に転じるという、日本の他の過疎地域と同じような動きをしていきます。

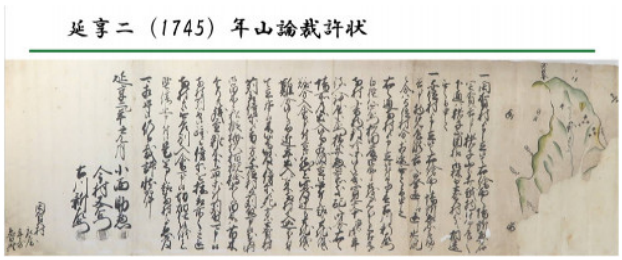
https://www.travel-zentech.jp/japan/Hyogo/Shiso_City.htm

宍粟市の中でも私が研究するのは集落、大字と呼ばれる単位です。その大字の名前は、閏賀(うるか)といいます。宍粟市には南北に揖保川が流れていて、閏賀は河川上流の西岸に位置します。閏賀の世帯数は、戦後は 60 から 70 前後を推移していて、世帯数はあまり減っていないのですが、人口はかなり減少しています。宍粟市全体の景観と同じで、森林が多くて田畑が少ない典型的な中山間地域です。

この航空写真は、1947 年に GHQ が撮影したものですが、山林がはげ山になっています。閏賀には、自治会が管理してきた集落運営の記録が残っており、閏賀区有文書と呼んでいます。自治会の倉庫の中に草刈りの道具などと一緒に入っていて、江戸時代から 1980 年代 90 年代くらいまでの文書が雑多になっていました。実は、閏賀区有文書の一部は、2009 年に台風による水害で被災しました。それが「資料レスキュー」という形で、専門家の力によって修復されたという歴史もあります。



閏賀区有文書の中でいちばん重要な資料は、延享２年(1745 年)、江戸時代中頃に作られた山論再許状です。江戸時代には、山は人々が生活する上で非常に重要な資源だったのですが、それ故に近くの村と山の資源を奪い合う争いごとが起こります。争いを領主が裁定して、この山はこの村の山という証拠書類が、今日まで大事に保管されているということになります。



私は、この地域の古老の方たちから聞き取りを何度も行ってきました。そういった成果として「閏賀の歩み」という冊子を作成しました。私もこの本に閏賀区有文書の分析結果を寄稿しており、閏賀では『閏賀のあゆみ』刊行記念講演会も開催しました。

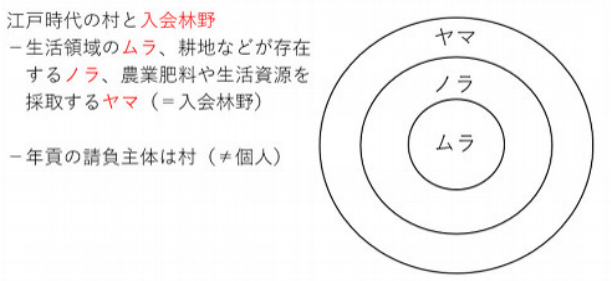
こうした地域歴史実践の活動の中で私自身はいろいろなことを学びました。地域の歴史のなかには、慣行など文字に残らないことが多分にあるのですが、ヒアリングをすると古老の方が即座に答えてくれることもあります。たとえば史料の中に「黒木」という言葉が出てきて、何の種類の樹木なのか見当がつかないのですが、この地域では「黒木」というのが売り物になる針葉樹を意味するのだと古老に教えられるといったことがありました。このような知識は辞書を調べもわからず、聞き取りの重要性が伝わると思います。

また、研究者が歴史資料を見て、一方的にこの地域はこういう価値を持っていると判断するのは簡単ですが、研究者の視点が、今を生きる地域の人たちにとって有益だとは限りません。『閏賀のあゆみ』を制作する過程では、閏賀の人たちに教わったりしながら、お互いに意見を交わす中で、その地域の歴史像を見直してみたりしたことが冊子を出すことにつながりました。地域で歴史を研究するということが、地域の側にもメリットをもたらすよう追求しながら歴史研究をすることが重要だと考えています。

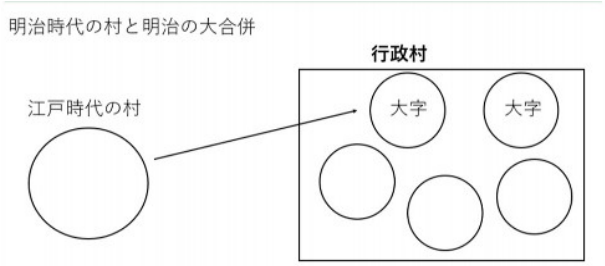
1.　戦前戦中の中山間地

今日は、1945 年以降の戦後の話を中心にしますが、その前提として江戸時代の話を少ししたいと思います。こちらの図は、「村」の生活領域

を概念的にあらわしたものです。住居のあるムラ、田んぼや畑からなるノラ、その外側のヤマから構成されます。ヤマからは、田畑を耕作する肥料を採取します。ヤマは、農業経営する上で必須の資源として存在していました。ヤマは近代以降個人の所有地となる場合もありますが、江戸時代には、多くの場合入会林野という村人たちが共同の所有・利用する場所でした。なぜ共有地だったのかというと、これは江戸時代の納税の仕組みと関わります。江戸時代は、年貢の請負主体が個人ではなく村でした。村に課せられた年貢をきちんと納めるには、村人たちが農業を継続して行えることが前提となります。そのために、山を共同で守り管理することが重要でした。



江戸時代の村がそのまま近代につながるかというと、明治になって 1889 年頃大きな町村合併がありました。その時村は平均で５、6 村合併して、近代の行政組織としての行政村となります。今の自治体は補助金や地方交付税といった形で財政的に中央に依存せざるを得ませんが、この頃の行政の仕組みは異なります。



行政村は、財政的にはかなり自律していて、むしろ補助金などは期待できず自己責任で運営するという側面がありました。この当時、自治体にとって大きな財政負担となっていたのは学校でして、近代社会に順応した人たちを育てることが重要で、各村に学校を作るため、校舎を造ったり教員を雇ったりするのにお金がかかりました。そうしたなかで、明治、大正期頃の行政村は、自力で財政運営をするために財源を創出する必要があり、その一つに部落林野統一事業というものがありました。

部落有林野というのは、江戸時代の村＝大字の共有地であったヤマを指します。近代になると、地租改正によって共有地が誰のものであるが定めようとするのですが、こうした山の所有権の確定はなかなか難しくて放置されたりしました。そうした山林を合併した行政村の財産に統合してしまおうというのがこの事業です。山林を行政村の持つ財産として確保し、行政村運営の財源にしようとしたのですが、結局それもなかなかうまくいきませんでした。

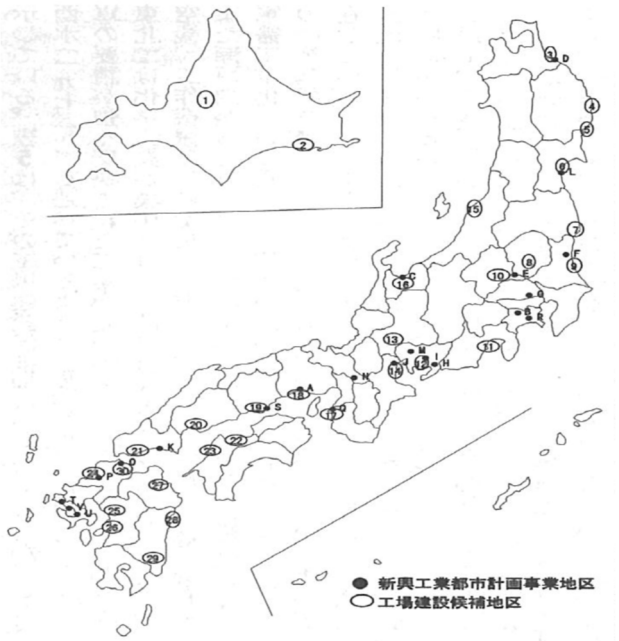
大字で使ってきた山が使えなくなるというのは、そこに住んでいる人たちからすれば困るわけで、統一事業は難航しました。その中で、形式上の所有権は行政村＝自治体としながらも、大字で慣行的に使い続けるという形がとられることも多々ありました。閏賀でもこのような経緯で、所有権自体は行政村に統一されるのですが、山林の慣行利用が続くことになります。

ここまで、財政的な面でいえば行政村は比較的自立性が高かったと説明してきましたが、それが大きく変わるのが 1920 年代から 30 年代頃です。その一つのきっかけが昭和恐慌でした。1929 年に世界恐慌が起こります。戦前日本の農村ではかなり養蚕が行われていて、生糸が日本の主な輸出品で、多くがアメリカに輸出されていました。しかし、アメリカで恐慌が起きると対米向けの生糸が売れなくなってしまいました。この影響は甚大で、昭和恐慌は特に農村部に長期的被害をもたらしました。

こうなってくると行政村の自立した運営が困難になり、中央から地方への補助金などのお金の流れができてきます。失業対策や公共事業といった形で、国が経済に介入する動きが進みました。農村部では救農土木事業と呼ばれる公共事業が大規模におこなれました。これが一つの画期で、中央政府から地方政府への補助金が増加して中央と地方の関係が大きく変化してきま

す。

こうした傾向に拍車をかけたのが戦争です。1937 年ころから日中戦争がはじまり、日本は戦時体制に入っていきます。その中で戦争を遂行するための兵器を生産するために、重化学工業にかなり重点的に力が入れられます。今の太平洋ベルト地帯に近い地域に、新たに工業都市を作って重化学工業を発展させようという政策が行われました。静岡の機械器具や岐阜、大垣、岡崎での航空機産業、四日市の造船、私の研究する兵庫県ですと播磨、姫路のあたりで機械器具産業がかなり盛んになります。そして、重化学工業を各地で発展させるという目的のもとに、中央政府が積極的・計画的に地方経済に関与し、中央・地方の関係が変化していきました。



新興工業都市計画事業地区及び工業建設地域の分布（水内1999）

中部
　静清：機械器具
　拳母・岡崎：航空機
　岐阜・大垣：航空機
　四日市：造船
関西
　和歌山：鉄鋼
　播磨：機械器具

兵庫県では姫路が工業化の拠点となり、臨海部、都市部で工業化が進みますが、その影響は山間地域にまで及びます。当時の資料には、播磨の工業化が今後ますます進展すると予想されるため、そのための電力を近隣地域から求める必要があると書かれている。そのために開発が進んだのが宍粟郡、揖保川でした。揖保川は、宍粟から姫路へ南北に流れる河川なので、発電所を作って電力を確保し、さらに工業用水の供給も行う計画が立てられました。この時、閏賀の近くに安積発電所が建てられることになります。安積発電所は、引原川と揖保川が合流する地点にあります。冒頭で閏賀を襲った水害にも言及しましたが、その分流れが急で発電量が期待できたということです。

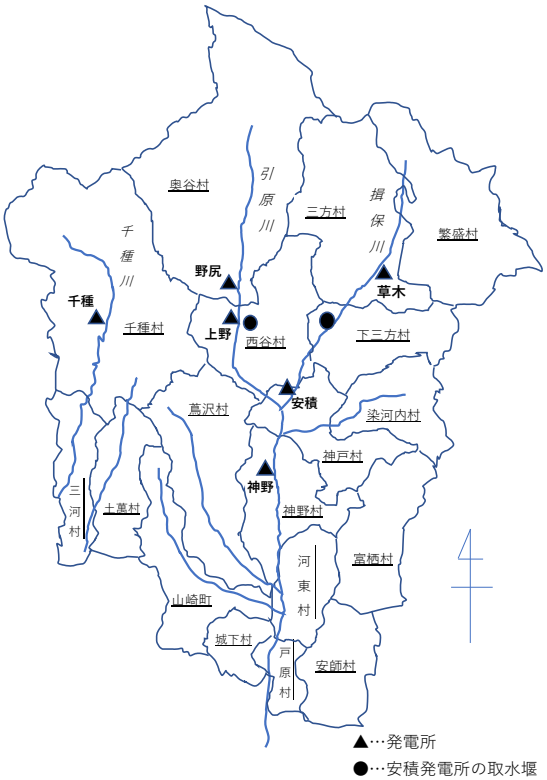


図1　宍粟郡内の発電所
出典）兵庫県農地林務部編（1954）『兵庫の林業』頁の図版を参考に筆者が作成した。

安積発電所には貯水設備がなく、取水堰から流れてきた水流で発電し、水はそのまま川に放出されます。この時重要なのは、取水堰から放出地点までの間、川の水量は減るということです。水量が減るとどうなるかというと、そこで農業をしている人たちが十分水を使えなくなったり、当時行われていた、筏流しという川を使った木材の運搬に支障が生まれたりします。他

にも、鮎とかイワナなどの魚を取ることが人々の生業の一つでしたが、そういった生活にも影響を与えることにもなりました。

つまり、地域住民たちの元々の河川利用と、工業化を進めたい兵庫県の利害が対立することになりました。結果として、農業に関する農業水利権はある程度保障されて、取水堰を改良して農業が立ち行かなくならないようにすることなどが兵庫県と地域の間で約束されました。しかし、農業水利権と比べると、筏流しとか漁業に関する補償は十分になされませんでした。筏流しをしていた人にとっては仕事を奪われることになったかもしれませんが、一方で発電所を建てるために一定の就業機会も生まれました。この就業機会は建設期間中に限られますが、地域での就業の在り方、経済の在り方が変わるきっかけになったのがこの安積発電所の建設でした。

2. 戦後の地域開発と中山間地

戦後になると、復興の過程で地域開発が行われました。1950 年に国土総合開発法が制定され、河川開発などが実施されます。静岡県の例では、天竜東三河特定地域総合開発のなかで佐久間ダムや秋葉ダムが建設され、住居や田畑が潰されたりしています。ダムを造ることが重視されたのは、工業中心の経済復興と荒廃した国土の保全が目的であったためでした。

高度経済成長期の全国総合開発計画では、地域間の経済的な格差が問題視され、地域間の均衡ある発展がスローガンになります。全国諸地域でバランスを取って工業化をしようという動きが出てくるのです。しかし、この時「時新産業都市」「拠点開発」地域に指定された地域の多くでは公害が発生してしまいました。

高度経済成長期の拠点開発の対象に兵庫県播磨も指定されますが、山間地域の宍粟は直接の対象にはなりません。しかし、それにともない山間地域にどのような影響があったかといいますと、県南部で工業が発達して労働需要が生まれるので、山間地域からの人口流出が生じます。敗戦直後は、引揚げ者が農村に多く滞留していたのですが、実家の農業を継ぐことができない次三男は仕事にあぶれていました。ところが、高度成長期にこのような労働需要が生まれてきますと、次三男は都市部で働き、農業をするより高い賃金を得られるようになります。女性も流出すると、農村の長男は嫁不足にも悩まされました。

一方で、山間地域では人口流出というネガティブなことだけではなくて、ポジティブな変化もありました、戦後は山林をめぐる状況が大きく変化します。エネルギー転換でガスが普及し、里山の薪や木炭を使わなくなりますが、経済復興のなかで建材需要が増え、木材が高価格で飛ぶように売れる状況となります。伐採箇所にも積極的な造林が行われます。しかし、1960 年代に外材輸入が増えてくると国産材の価格は低下していってしまいました。

3. 閏賀村の変容

2 こうした中で閏賀に住んだ人たちはどういった変化を経験したのでしょうか。閏賀には共同で利用・管理されるヤマ、共有林がありました。戦後は木材が高値で売れるので、共有林の木を売ったお金でむらに農道を造ったり、各世帯がテレビを購入するためのお金を配ったりしました。共有林は、住民の生活を豊かにしていました。

共有林の樹木は、定期的に管理をしなければいけません。木の伐採や、木に登って枝を打つなど熟練を必要とする重労働は男性の仕事でした。一方で、閏賀村は普段男性がいない村でもありました。山間部で田んぼや畑が少ないため、農家世帯の男性たちはどんどん出稼ぎに出ました。閏賀の男性たちの多くは林業出稼ぎに従事し、主に中国山地や近畿地方の山林で山籠もりの生活をしていたということが聞き取りでわかりました。また播磨では播州織という織物が戦前から盛んで、若い女性が女工として出稼ぎをすることも 1950 年代くらいまで盛んでした。

そうなると、村に残るのは既婚女性と子ども

と高齢者です。その中で既婚女性が中心となって農業と家事育児を担うこととなります。山の管理は、出稼ぎから男性が帰ってくる盆や正月に集中的に行っていました。

しかし、1960 年代に外材が輸入されてくると林業出稼ぎも儲からなくなってきて、会社や工場で働く雇用労働者が増加していきます。ただし、山間部にこうした職場は乏しかったので、若い人ほど外へ働きに出てしまい、出稼ぎとは違ったかたちで男性がいない、特に若者がいない状況になります。

一方で、林業は儲からなくなったと言いましたが、拡大造林という政策がすすめられて、閏賀でも労働需要が発生していました。共有林の木を売ってテレビを買ったという話をしましたが、今はだめでも植林すれば 30 年後、50 年後に利益になる夢がこの時期にはありました。だから男性や若者が減っても造林をしようということになります。そこで白羽の矢が立ったのは村にいた既婚女性たちでした。この時期には、家電や農業機械が普及してきて、既婚女性が担ってきた農業や家事の手間が多少緩和されたと言われています。そこで生じた余剰時間を共有林の管理にあて、将来のための拡大造林がなされたのです。

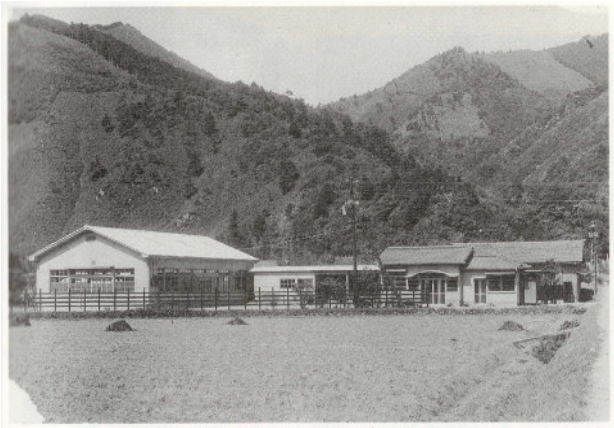
しかしながら、拡大造林が今日の地域にもたらした結果は残念なものといわざるを得ません。宍粟でも過疎高齢化が進み、林業というのは手入れをしない山が荒れてしまうのですが、その担い手がいなくなっていきました。拡大造林で植えた針葉樹はだいたい半世紀くらい経過して伐期になっているのですが、外材輸入が続き国産材価格が低いまま今日に至っています。中山間地域が疲弊する一つの大きな要因だといえます。

高度経済成長期に閏賀の人たちが経験したことの二つ目として、工業化の話もしたいと思います。1950 年代くらいまでは山間地域の主要産業は農業と林業でしたが、工場を造って工業を起こそうという人物が出てきます。それが一宮電機という今も続く会社で、秋田喜市さんという方が閏賀に工場を造ることになりました。実は、秋田喜市さんも若いころから林業出稼ぎをしていました。一宮電機を創る 1960 年以前は、中国山地の山という山を飛び回る単身赴任生活をしていたそうです。

－一宮電機の創業者秋田喜市
－1909年2月24日、秋田卯八・サキ夫婦の長男として閏賀に生まれる。小学校卒業後は家業の農業や酒屋、炭焼きの出稼ぎ。1929年、20歳で徴兵検査に甲種合格し海軍入隊。その後、戦前－戦後は林業（主に伐採搬出）に従事。

ただそうした夫の姿を見て心配したのが妻のハツエさんという方でした。ハツエさんは体が弱く、夫のいない家を高齢の両親と支えるのがきつかったそうです。夫がずっと外に出ていることを解決したくて、モーターの巻線の仕事をやってはどうかということを夫である喜市さんに提案しました。その時のことを秋田喜一さんは自伝に「ハツエさんや父親から巻線の話を聞いた時、私は考えた。秋田木材は大勢の従業員を抱えているが、彼達も私と同じく殆ど単身赴任だ。みんなにつらい目をさせている。これはやはり職場と家庭がつながるようなことを考えんといかんな… 」と記しています。普通は、職住一致が農業、不一致が雇用労働という見方を

されると思いますが、ここでは出稼ぎが職住不一致状態で家庭に負担をかけることだと認識されます。それを解決するために地元に工場を建て、一宮電機を創りました。1960 年の創業当初のことです。



㈱一宮電機創立当時の社屋（昭和 35 年）

高度経済成長期には家電の需要が増えるので、モーターを作ればどんどん売れる時代でした。会社は松下電器の下請けに入ってどんどん工場も増やしていきました。でもなかなかうまくいかない点もありました。従業員数は 1968 年に男子 200 人、女子 600 人だったのが、2 年後には男子がかなり減っています。当時の新聞にも書かれているのですが、地方の中小企業から都市部の給料のいい大企業が、若い男性を引き抜いてしまうというのが社会問題となっていました。若い男性が林業で単身赴任することを問題視したのが秋田喜一さんでしたが、男性の働く場所をつくるのは容易ではなく、工場では既婚女性が主な労働力となりました。一宮電機の役員まで務めた方に当時のお話しを伺ったところ、その方は松下電器から課された仕事をこなすのに残業を課されていたのですが、たくさんいる女性たちは家でご飯の仕度をしなければならず、残業ができなかったそうです。

林業ではなく、工場での雇用労働にメリットは多数存在します。林業出稼ぎをしていた方の話では、山で怪我したり亡くなったりした人もたくさんいたと語っていました。林業出稼ぎでは、山の中に小屋を作り、何週間とか何カ月も住み込みで山の木を刈ったりします。そういった出稼ぎ中に、一緒に来ていた高齢者の方が亡くなってしまったことがあったそうです。しょうがないからその場で遺体を焼いて、息子さんが後日取りに来たということです。出稼ぎ労働者には組合もなく、労災にも入っていなかったそうなので、怪我や病気に対する制度的なセーフティーネットが存在しませんでした。聞き取りをした方にも出稼ぎ先で病気をして、雇っている京都の親方が支払いをしてくれたという方がいました。制度的な福利厚生が欠如していた点は、林業出稼ぎの大きなデメリットとして認識されていたと思います。それに対して、一宮電機で働いた方は、あまりいい方ではなかったけど福利厚生を導入してくれたと語っています。この方は林業出稼ぎをした後に一宮電機に勤め上げた人で、そこは大きな違いだったと回想しています。

こうして、閏賀にも雇用労働者が増えていきます。閏賀の人たちによって、雇用労働はどのような経験だったのでしょうか。秋田喜一さんの息子で、それまでは林業の仕事をしていた二代目社長の方は、「私らは 1 ミリよりこまい単位のことは知らなんだ。一番少ないんが 1 ミリの単位やと思っとった。ほんなら、その 100 分の 3 ミリとかね。それを 30 ミクロンいうんじゃと。1 ミクロンいうたら千分の一やと。その単位の仕事になったら、そらぁ私自身もね、どんな仕事しても、よぉやるんかなぁいう心配はあったわ。それが一番ごっつい違いやなぁ。」と語っていて、いかに林業労働と工場でモーターをつくる仕事が感覚的に違うか、同じ労働でも戸惑いを覚えていたことがわかります。

一宮電機で働いていた女性の話も聞くことができました。この方は夫が早くに亡くなって、自分が働かなければいけなくなり、一宮電機に勤めることになった方です。嫁入りした家では農業もしており、高齢になった義理の両親もいました。会社で納期が迫っていても、仕事を休んで家事や農業をしなければいけない、早く帰るために残業も出来ない、しかし仕事を休むと会社から怒られるという、なかなか過酷な状況にありました。この方は仕方なく、会社から帰

った夜にコンバインに乗って農作業をしていたと話していました。この方は女性の労働負担という点ではやや極端な例かもしれません。だけれども、家電や農業機械の普及は現金収入の必要性を増加させ、高度成長期には女性もたくさん働きに出たことは事実です。当時の規範として子育て、家事、家の農業は嫁に来た女性の仕事とされていた面もあり、多くの女性たちが重い労働負担を負っていたといえます。

まとめ

一宮電機に関する話は、山間地で工業化が進んだ時に生じる様々な矛盾を示しています。男性が働き続ける場を作るのが難しかったこと、女性が家事、育児、農業を担わねばならなかったことなどです。それは、秋田喜一さんが掲げた理想が果たせたとは言い難く、また今日の現状にもつながっていくと考えられます。このことをどう評価するのかは難しい点です。今回お話ししてきたように、戦前の河川開発が起きたときには、自分たちの生活を守ろうと申し立てしました。共有林への植林を頑張って続けたのは、それが将来の利益なると考えたためです。一宮電機の事例は、若者、労働者を地域にとどめるための取り組みでした。これらの話から、山間の地で生きようとした人々の軌跡を示せたのではないかと思います。しかし、その結果として今日の過疎化とか経済の停滞などがあるというのが現実です。つらい話でもありますが、それをきちん説明するのも歴史研究者の役目だと考えています。歴史学は政策提言をする学問ではなく、今日どうすればいいかということを私は言えません。だけれども、歴史が今日の社会にどうつながっているのかを、歴史資料や聞き取りによって明らかになったことから考えることは、明日を生きるためのヒントを与えてくれるのではないかと思います。本日はご清聴ありがとうございました。

連載６

ブラ林 in 龍爪山

県内各地の街を歩いて、その地域の歴史や風土を紹介します。第６回目は、静岡平野か仰ぎ見ることのできる龍爪山、古来から修験道の山でした。林事務局長がブラリと歩くこの連載は、あくまで旅行記で主観的な感想が含まれます。

前回の浅間さんのブラ林で、端山に対して次は奥山である龍爪ですと言った手前、龍爪山へ。金曜アクション登山部有志、総勢４人で平山駐車場の登山口に来ました。中学や高校の遠足で登った山ですが、意外と歴史は知られていません。

静岡平野の東半分から北を見るとその偉容を見せる龍爪山、海からの力が海底火山を千メートルの標高まで押し上げました。龍爪山と深く関わると思われるのは静岡市葵区安東にある熊野神社、明治までは熊野三所権現社と呼ばれていました。権現とは仏が神の姿を借りて現れたもの、熊野信仰は山を「山中他界の霊地」として重んじることで知られています。

南北朝までたいそう力を持っていた熊野権現社の北側は、北安東荘として熊野神領の荘園がありました。そこから北を臨むと、田んぼの向こうに麻機沼（畔には熊野十二所権現があり、そこへ繋がる川を十二所(そう)川といいました）が広がり、それ越しにそびえている龍爪山。現世と他界、仏教の教えの絵図が眼の前に広がっていました。龍爪山は、仏教と山岳信仰が結びついた修験道の修行の場所であったことは容易に想像できます。

室町時代以降は熊野権現に代わって、京都醍醐寺三宝院の真言密教、当山派が力をつけてい

きます。街中の別雷神社の別当寺(その神社を支配・管理する寺)、明治の廃仏毀釈で廃寺となった龍相山雷電寺も同派であり、社僧は名前からして龍爪山で修業を積む当山派の修験者であったことが示唆されています。浅間神社の神宮寺である惣持院、今は廃寺となっている麻機の光明寺や霊仙寺は、かつて、その社僧の奥の院であったといいます(『麻機誌』より)。浅間神社の別当寺の建穂寺は、もともと総合大学のようなさまざまな教えを修行するところでしたが、家康の寺院法度により京都醍醐寺の末寺となり(『建穂寺記』より)、いわゆる古義真言の修験道や当山派山伏の流れに入りました(静岡市史)。これらの諸寺における龍爪山をホームグランドとする修験道は、やがて明治初期の廃仏毀釈の直撃を受けることとなります。

登山道を詰めていくと、穂積神社がある平らな一帯に出ます③。中世から近世にかけて修験道の中心地、ここにお経を保存する経蔵があったとされていますが(『駿河龍爪山由来』)、廃仏毀釈によって仏教施設はまったく残っていません。この場所は、江戸時代「黒川山龍爪平」と記されていたといい(『龍南の古文書』)、古くから「リュウソウ」と呼ばれ、龍爪の指す範囲は、山頂部ではなかったのではと指摘されています。

龍爪権現の信仰が広がりを見せ、清水区樽の望月家に伝わる文書によると信濃の飯縄権現を下地にして龍爪権現がつくりだされてきた可能性があり、武田氏の駿河支配とも絡んでいると考えられます。江戸時代を通じて、人々の暮らしに深く繋がる信仰のかたちとなりました。『駿府風土記』には、「山上権現アリ大社ナリ。火災疱瘡除ノ守出ル。駿城町家板行ノ像ヲ以戸守ニ張ル。(中略)城下ニ諸町人参詣群衆ス。常ニ婦人子供モ山上ス」とあり、町場の暮らしの中にも龍爪権現の信仰が身近に取り入れられてきました。

にもかかわらず廃仏毀釈後の明治８年、穂積神社は、修験道とかかわる龍爪権現社を解消して嘉彰親王によって命名されたとし、その時の石碑が建っています。戦争中は弾よけの神として信仰を集めました。

穂積神社の裏を薬師岳に向かって進むといつ果てるともない金属製の階段が現れます⑧。永遠に続くのではないかと思うほどの階段を上りきると薬師岳へつながる稜線に出ます。ここから山頂までは5分。龍爪山は双耳峰である薬師岳と文珠岳がならんでいます。ここだけは仏教関係の名前が廃仏毀釈にもかかわらず残りましたが、薬師と文珠、如来と菩薩のこの組み合わせはかなり異例です。

山頂の気温は寒気の影響で5度、平地との格差が大きく、これ以上気温が下がれば発雷の危険が高まります。目の前の雲は黒味を帯びていて、下界の景色を隠しています。

早々にお昼を切り上げて帰路に。最短のコースを選んだのですが、これが急斜面を降りるコース、しかも前日の降雨でところどころぬかるんでおり、かなり滑ります。則沢へ分ける道もあり、ルートファインディングにも気を使いながら転がるように下りてきて道白平で休憩。ここも経蔵や五輪塔などが見つかっており、修験道の修行の場だったとのこと。文殊菩薩像は経典を必ず持っていることから、経蔵にちなんで文殊岳の名前が付けられたのかもしれません。

再び少し登り返すと、道白山手前の鉄塔から

眺望が効きます。文殊岳の稜線の並び、若山の山塊が大きく見えて賎機山陵に連なっています。この直下が糸魚川静岡構造線。稜線も前述のかつての修験道の道と考えられます。再び転がるように下りてきて登山口へ。最後に入ったのは平山温泉は硫黄の香りのする秘湯、ここで体をほぐしながら、龍爪山は修験道が修行の場に選んだだけのことがある厳しい山とつくづく思いました。